

## 2022,12 日本の稲作を守る会 民間稲作研究所便り

12月のお米は有機栽培 白・玄米コシヒカリをお送りします。  
生産者は郡司利一さん（茨城県水戸市）  
今回は1月7日（土）配送予定です。  
御都合の悪い方ご連絡くだされば対応いたします。

### 研究所の事業理念と守る会の経営理念を策定

前理事長の稲葉光國さんが黄泉の国に旅立たれて、間もなく丸2年を迎えようとしています。光陰矢の如しと言われますが、まさしく時の流れの速さを痛感する昨今です。稲葉さんの亡き後、舘野廣幸さんを理事長として新たな体制で運営されているのを機に、展開の羅針盤とも言える事業理念を定めるとし、今8月より検討を開始し、20通の応募の中から下記の作品を研究所の理念として定めることにしました。

この理念は、副理事長である古谷慶一さんが応募したものを、一部加除修正したものです。生前、稲葉さんが強調されていたキーワードがきちんと盛り込まれています。また、目指すは持続可能な‘農業’だけではなく、広くあらゆる生き物を含めた“社会”であるところに着目していただきたいです。

**地域循環型有機農業ですべてのいのちと共生する持続可能な社会の実現**

併せて、日本の稲作を守る会では経営理念を定めました。研究所20周年・守る会15周年記念誌のテーマを採用しましたので、ご存知の方々も多いかと思います。

**過去に学び 今を知り 未来を創る**

研究所も守る会も、これら理念に基づいて社会貢献に努めたいと願っています。会員のみな様方さらなるご支援をお願い申し上げます。（文責：斎藤一治）

### 農林水産省の若手職員の農村派遣研修を受入れて

10月3日～18日の15日間、農水省が毎年行っている農村研修に、入省4年目の2名の職員を受入れられました。本来であるなら入省2年目に実施していますが、コロナ禍の影響で2年待たされたようです。まず彼らのプロフィールを紹介しますと、A君（男）は東大大学院工学系研究科卒の技官、消費・安全局-農産安全管理課-農薬対策室-農薬指導班で、農薬の適正使用推進に関する指導業務を行っています。もう1名のBさん（女）は東洋大学文学部卒の事務官で、大臣官房-秘書課-総務班-大臣官房政務官秘書第2係に勤務しています。

研修内容は、稲刈り・粃摺り、畑の除草といった農作業、農家民宿の食事の準備、とちぎ国体のマルシェでの売り子など、我が家が実施している六次化の業務に携わってもらいました。最終日の前日の1



A君（左端）・Bさん（右端）と古谷夫妻

7日、民間稲作研究所の理事会の開催日だったので、2人にも傍聴者として会議に加わって幅広い視点で有機農業を勉強してもらう予定でしたが、我が家で急病人が出てしまいキャンセルせざるを得なかったのは残念でした。

たった2週間という短い期間でしたが、2人の研修の感想を提出レポートから紹介してみます。まずA君は、日本は病気や害虫が発生しやすい気象条件にあるので、必要な範囲で農薬を使用できるようにしておくことが重要と考えていましたが、「農薬や化学肥料を使わなくとも立派に成長し、たわわに穂った稲を見て大変感銘を受けた」と述べています。教科書と現場の違いを読み取ってくれたようです。

次にBさんは、生産サイドより消費サイドに興味を持ったようで、「有機農業の取組面積を25%にするには、消費者の理解をすすめることが一番必要」「農家よりも消費者に対する理解促進がより大切」と書いてくれました。常日頃あまり気にしていなかった生活（消費）の側面を指摘してくれました。

研修の担当者としては、「大田原の土の匂い」を嗅いでもらったことが一番の成果だと思っています。霞が関というコンクリートの中で仕事をしている2人にとって、土の匂いを忘れないで日々の仕事に励んでくれることを願っています。その匂いが薄れてきたらいつでも大田原へ。（文責：古谷慶一）

## 塩谷町のみどり戦略事業に関わる視察研修

今年度から、塩谷町ではみどり食料システム戦略事業に取り組みを始め、民間稲作研究所はアドバイザーとしてその推進にお手伝いをしております。今年度の事業の1つとして、現地視察研修を10月26日（水）に実施しました。視察先は、有機米の学校給食で全国的に有名な千葉県いすみ市で、参加者は13名でした。

いすみ市では、2012年に兵庫県豊岡市をモデルに自然と共生する里づくり連絡協議会を設立、翌2013年に手作りの水稻無農薬栽培に挑戦するが失敗に終わる。そこで、農事組合法人みねやの里を核とした水稻有機栽培の実証事業（3ヶ年）を2014年から始め、その技術指導にあたったのが稲葉光國氏でした。

稲葉さんの研修は、有機稲作に取り組む姿勢として環境汚染、遺伝子組換え問題、農薬による子供の健康問題、食料主権などをしっかり踏まえた内容であって、これらの知見が取り組みにあたって大いに影響をもたらしたと、農事組合法人みねやの里の代表理事、矢澤喜久雄さんのお話は極めて重要と言えます。学校給食に有機米使用がスムーズに行った要因と思われます。儲け第一主義ではなくより高度な使命感が必要と思われます。



環境創造型「有機稲作」セミナー 2014年1月

指導者と農民の信頼関係も手伝って、基本に忠実な栽培が初

年目から好成績を収め、3年目には3名から5倍の急増し、2021年には25名にも増えたのです。その背景には、この事業を当初から担当しているいすみ市役所の鮫田晋さんの真摯な対応があります。真摯な態度といえば、塩谷町役場の担当者は、鮫田さん・矢澤さんに一所懸命に質問を行っていました。

研修当日、塩谷町役場を朝の7時30分に出発し、戻ったのが20時30分でした。片道4時間30分のバスの中は少々疲れを感じましたが、参加された方々はそれぞれの立場で得るものがたくさんあったのではないかと考えています。（文責：斎藤一治）